

国際経験で新しい自分と出会おう

南山大学国際担当副学長
兼 総合政策学部教授
博士(法学)

星野 昌裕氏 (高校39期)

1988-1993年 一橋大学社会学部
1991-1992年 北京大学歴史系(国費留学)
1993-1995年 慶應義塾大学法学研究科修士課程
1995-1999年 慶應義塾大学法学研究科博士課程

1995-1996年 日本国在中華人民共和国大使館政治部専門調査員
2002-2003年 Old Dominion University (Norfolk, Virginia) Visiting Faculty
2007年 The Maureen and Mike Mansfield Foundation(Washington D.C.) Visiting Fellow
などを経て現職



「名古屋の北川大学」と言えば、三浦朱門大先輩の奥様、曾野綾子先生の『太郎物語—大学編』に登場する大学として有名ですが、そのモデルとなった南山大学がいまの私の勤務先です。同じカトリック系総合大学の上智大学とは「上南戦」と呼ばれるスポーツ対抗戦を60年にわたって毎年開催していて、体育会に所属する数百名の学生が上智と南山で隔年毎に会場を移し、スポーツを通じて親交を深めています。



2019年NAFSA(ワシントンD.C.)の風景

現在私は、国際担当副学長として国際化を通じて大学の新しい世界を切り開く仕事を任されています。毎年米国で開催されるNAFSA、欧州でのEAIEといった国際教育交流分野の国際会議は圧巻で、大きなコンベンションセンターに世界中の大学がブースを出して大学の魅力をアピールしています。私も南山の責任者として参加し、世界各地の大学と協定を結んで学生を海外に派遣し、優秀な留学生を招いています。大学教員の仕事としては研究と教育がすぐに思い浮かぶと思いますが、こうした学務も職務です。国際交流に興味のある立高生には、是非大学教員へのキャリアパスを描いてほしいところです。

教育研究面では、東アジアの国際関係や現代中国の政治外交に関する授業を担当していますが、メインの研究対象は現代中国の民族問題です。大学在学中に北京から寝台列車に乗り3泊4日の旅の果てに到達した新疆ウイグル自治区は、イスラム教を信仰するウイグル族が数百万人もいて、顔立ち、言葉、服装、食文化などあらゆる面で中東風情にあふれていました。中国に抱いていたイメージとは完全に異なる街並みに圧倒され、多民族多宗教の中国が如何に統治されているのか、そのメカニズムの解明がライフワークとなりました。



新疆ウイグル自治区



中国と北朝鮮をつなぐ国際列車
(北京大学留学中)

1991年には立高で社会科の教育実習をさせていただいたあと、北京大学に1年間留学しました。留学中には、社会主義大国ソ連が崩壊する一方、中国は社会主義を維持しつつも市場経済のさらなる導入に舵をきり、また、二人部屋のルームメイトが北朝鮮からの留学生だったことに刺激を受けて平壤を訪問し、社会主義体制の変容をリアルに感じることができました。大学院進学後は、在北京日本大使館の専門調査員として外交の最前線で中国研究に従事する機会を得ました。

こうして研究の視野が東アジアの国際関係へと広がったわけですが、青梅線沿線の「8学区」から出たことのない私が国境を越えて新しい一步を踏み出そうとしたとき、背中を押してくれたのは卒業後も親交を深め続けた立高の同級生たちでした。卒業から30年以上がたち、あらためて自分の足跡を振り返ってみると、その原点が立高にあったことを実感します。私と同じように多摩地区から離れたことのない立高生も多いと思いますが、大学に進んだら是非とも国際経験を重ねてください。新しい自分と出会えるはずですよ。